

病害虫発生予察特殊報第3号

病名 シュクコンカスミソウうどんこ病
病原菌名 *Oidium* sp.

1 発生経過

茅野市の宿根カスミソウで、うどんこ病と思われる障害が発生し、本年大きな被害を受けたほ場が認められた。野菜花き試験場病害虫部で同定した結果、シュクコンカスミソウうどんこ病であることが明らかになった。本病は長野県で初確認である。

2 病原菌の同定

発病葉の病徴から、うどんこ病と診断された。検鏡観察したところ、菌糸は茎及び葉の表面に表生し、所々が分枝して分生子柄を形成していた。分生子柄先端に形成される分生胞子は単生で、楕円形～長楕円形をしており、フィブリン体は観察されなかったが、多数の顆粒状内容物が認められた。また、子のう殻の形成は認められなかった。以上のことから、本病を *Oidium* sp.によるシュクコンカスミソウうどんこ病と同定した。

なお、本病は大分県、広島県、福島県、宮崎県、香川県などで発生が報告されている。

3 病徴と診断

茎葉に発生する。病斑は典型的なうどんこ病の病徴を示すので、診断は容易である。病斑部の白い粉状物は放射状に広がる。湿度が高いと病斑は盛り上がり、盛んに分生胞子を形成する。主に風通しの悪い下葉から発生し始め、次第に上位葉へ進展して商品価値を著しく低下させる。病斑は古くなると灰褐色を呈するが、子のう殻は形成しない。激しく発病した葉は枯死することもある。

4 防除対策

- (1) 発病株を据え置き栽培すると次年度も必ず発生するので、発病ほ場では連作を避けるか、無病株で更新を行う。
- (2) 本病に対する品種間の感受性の違いは認められていない。
- (3) 本病に対する登録薬剤はないが、現在防除薬剤について試験中である。